

移民文化 グローバルに変化

神奈川産業人クラブ（中村幹夫会長、厚木商工会議所会頭）は6月12日、横浜ベイシエラトン ホテル&タワーズ（横浜西区）で2023年度の特別講演会を開いた。神奈川大学の小熊誠学長が「横浜鶴見の沖縄角力―沖縄からの移住と国際化」をテーマに講演。民俗学の観点から、多文化共生の時代を迎える中、地域ではマイノリティーながらも歴史の中でいち早く国際化が進んだ鶴見の沖縄同郷会で行われる角力を通し、文化の魅力をもといた。

港町・横浜 ― 同郷会が多く存在

相互扶助・アイデンティティー維持

グローバル化が進む世界で生きるために大切なことは自国の文化を客観的にみることです。日本の常識がそのまま世界の常識でないことは言うまでもありません。そこで日々、常識と思考していることを他の文化と比べ、



神奈川大学 学長 小熊 誠氏

で頭で勉強するだけでなく、自分の足を使って学ぶものだ」と聞き、興味をもちました。歴史書には残されていないような一般の人々の文化を訪ね歩き、地域の伝承や祭りに実際に接し、見たり聞いたりする中、その地域で人はなぜ暮らし始め、現在のような生活しているのかを考えるのが民俗学です。

80年代後半、南米からの移民も増加

深く長く影響を受けた中国の文化も学びました。中国と沖縄の民俗を比較研究する中、中国に出向いて現地の文化に触れたこともあります。2009年、家庭の事情で生まれ故郷の神奈川に戻り、職に就いたのが神奈川大学。大学院で教鞭をとり、大学附属の学際的研究機関で日本民衆の生活、文化、歴史を調査・研究する「日本国民文化研究所」で研究を続けました。そこで興味を持ったのが沖縄の出身者が多く暮らし、さまざまな行事を繰り広げている横浜・鶴見です。沖縄が本土に復帰して50年の節目だった昨年、NHKの朝ドラで舞台の一つにもなったその地域に根付いた沖縄の文化の研究を始めました。

といわれています。一つは主に著名な有力者が出身の異別に集まってつくる異人会。もう一つは、出身の市町村単位でさらにローカルな集まりとして発生する同郷会。沖縄の場合、多くは後者の例です。小さな村、沖縄ではそれを「シマ」と言いますが、そんな単位の同郷会が多く存在します。沖縄の人々はずっと同郷の意識が強い上に、本土に移住した人々には相互扶助と、生まれ故郷に対するアイデンティティーを維持しようと寄り集まることが多くみられます。自己の存在を自己に問いかけるように沖縄独特の言葉で語り合い、三線を弾き、そして沖縄角力を楽しみます。同じ日本ながら本土に住む人々の生活とはかなり異なります。

企業が事業を拡大するのに合わせ人手を求めたため、鶴見には沖縄出身の出稼ぎ労働者が多く住むようになりました。1923年の関東大震災後、復興共済活動を進める中で沖縄出身者同士の交流は活発になりました。25年には不慮の事故で亡くなった沖縄の労働者を悼むために同郷者が集まったのをきっかけに、沖縄の出身地域ごとに同志会ができたといわれます。そこで盛大に行われたのが「沖縄角力大会」。日本本土への同化を迫られるマイノリティーにとつては苦しいことも少なくなく、角力は精神的なよりどころの一つになったのでしょうか。第二次世界大戦に沖縄から出兵したものの、戦後、米国の統治下になつてしまった沖縄には戻れず、鶴見、川崎に住むことになった人も少なくありません。さらに80年代後半には、それまで南米で生活していた日系の移民者が帰国後、鶴見に移り住むようになると文化が入り交じり、国際化が進みました。沖縄角力も盛んに行われたといえます。

横浜・鶴見の沖縄角力

親睦深める「組み相撲」

「沖縄意識」再生産

日本本土で現在、一般的な「相撲」といえば、土俵の東西に分かれた力士の双方が中央で離れて仕切り、呼吸を合わせてぶつかり合う「立ち会い相撲」です。これに対し、沖縄角力は双方が最初から組んで始める「組み相撲」。韓国やモンゴル、中央アジア各地の相撲と同様に、レスリングに近い競技です。

日本本土で行われる相撲は、農作物の収穫を祝う祭りの儀式を起源にひろがり、中世には武士による戦闘の訓練、江戸時代には多くの観衆を集めた勧進相撲へと変遷し、現在の大相撲にいたっています。一方、沖縄角力は大陸の民俗文化の影響を大きく受けた独特の伝統です。その歴史はよく分かっていませんが、沖縄の古い武術である「手」を起源に、庶民の

ることで、同郷意識を確認することになります。鶴見で生まれた「二世」以下の人々は角力に参加したり、観戦したりすることで出自意識が形成されます。「沖縄意識」の再生産が沖縄角力を通じて継続されたのです。男性同士だけでなく、大会の前座として、子供や女性が参加するようにもなりました。

ただ、時代が移り変わる中、横浜、川崎の沖縄異人会では会員の高齢化が進んだほか、二世・三世の拡散もあり、沖縄角力大会を継続することは容易ではなくなっています。そうした中、モンゴル出身者が参加することもありました。日本に出稼ぎにきた日系南米移民が

多文化共生 都市の特色ある民俗文化

沖縄角力の大会に参加することもあります。もともと南米移民には沖縄出身者が多く、親戚や知人を頼って横浜・鶴見を訪れ、沖縄角力に出合ったという背景もあります。南米でも移民文化の継承として沖縄角力の大会が行われています。鶴見を訪れ、誘われるままに大会に参加し、沖縄文化への高い同質性を肌で感じ取る中、沖縄異人とのつながりを確認する機会になっていきます。今では移民の家族が横浜・鶴見で行われる角力大会を観戦し、ポルトガル語やスペイン語で声援を送る姿も多く見られるようになっています。

もともと先人たちが遠く離れた横浜・鶴見の地から故郷の沖縄を想いながら、親睦を兼ねて楽しんだ沖縄角力です。多文化共生の時代を迎える中、それまでの沖縄出身者による自文化包括からグローバルに変化。国際交流の場に進化してきたといえるでしょう。

角力大会、国際交流の舞台に進化



講演する小熊学長

日本本土から沖縄を観光で訪れる人が増える一方、沖縄出身の歌手や俳優が数多く日本本土を舞台に活躍するようになっています。日本の大衆文化に沖縄が溶け込むとともに、沖縄文化の認知度も高くなっています。横浜・鶴見で沖縄角力が続いているのは、こうした社会の変化と同時に、鶴見に移り住んだ沖縄異人が誇りを持って継承してきたことに加え、沖縄角力に関われば皆仲間だという沖縄異人の開放的な人間関係が深く影響していると考えられます。都市における特色ある一つの民俗文化として注目されます。

沖縄は日本の周縁ながら日本はもろろん、中国、アメリカの文化にながらることも少なくありません。民俗学の観点から日本を、そして日本人としての自分を客観的に眺めることが、多様性が求められるこれからの時代を生かすために必要なことだと考えています。

神奈川産業人クラブ 特別講演会